

## 子宮がん検診を受けましょう

子宮がんは女性のがんの中で第2位と、統計的に罹患率の高いがんです。最近では若い人にも増加していますが、性器出血のない人も年に一回かかりつけ医などで検診を受けておきましょう。本市では20歳以上の方なら偶数年齢はどなたでも気軽に受診できるシステムになっており、性器出血などの症状のないうちに受診しておくことが大切です。

検診は細胞診です。子宮頸(けい)部や体部(子宮内膜)から細胞を採取して、細胞を染色します。パパニコロウ染色といいます。専門医・スクリーナーが顕微鏡下に観察し、頸部は、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵと分類し、体部は陰性、陽性と診断します。頸部のパパニコロウⅠ、Ⅱはがんの心配はありません。Ⅲは異型上皮が疑われ、繰り返し細胞診を行うようになります。

Ⅳはがんが疑われます。この場合はコルポスコープ(拡大鏡)を用いて詳しく観察して、最も疑わしい部位から組織の一カ所を採取して、この組織を顕微鏡下に観察します。コルポ診は専門家が行いますので、悪い部位を見落とすことはありません。これらの成績を参考に内診を行い、臨床的に子宮頸がんの診断が行われます。

子宮体がんの検診は50歳以上の方で閉経後の出血のある方、月経血の多い方、褐色のおりもののある方が受けることができます。29歳以下の方でも不正性器出血がある方は積極的に受診しましょう。社会保険が適用されます。

検診は子宮内膜から細胞を採取して頸がん同様パパニコロウ染色を行い検鏡します。がん細胞が陽性か陰性かがわかります。陽性の場合には子宮内膜搔把(そうは)術を行い、内膜組織を採取し、組織学的に調べます。前がん状態を含めてがんとわかったら、どの位進行しているかを、ゾンデ診、ヒステロスコープ(内視鏡)、CT、MRI、膀胱(ぼうこう)鏡、直腸鏡を用いて検索します。さらに遠隔転移も検索します。

平成15年7月  
淵 勲